経済学部１年生アンケートの集計結果報告

柴　田　淳　子
毛　利　進太郎

１．はじめに

文部科学省が公表した「平成27年度学校基本調査（確定値）について」において，過年度卒業者を含めた大学進学率は，前年度と同じ51.5％過去最高であった。18歳人口は減少傾向にあるものの，それに反して大学進学率は増加傾向にある。大学を受験する学生を取り巻く環境が変化していることに伴い，入学する学生にも様々な変化がみられる。このような状況の中で，入学した学生の学習状況を正確に把握することは，入学後の教育活動を行う上で必要であると考えられる。

そこで，我々は，本学経済学部１年生において高校での学習状況や進路の決定状況，さらに学生生活における不満を調べるために，2015年度と2016年度の１年生対象科目においてアンケート調査を実施した。本報告では，この２年間のデータにおける比較を行いながら，アンケートの集計結果を報告する。また，学生生活における不満を明らかにするために，テキストマイニングを用いて自由記述データからの情報抽出を行い，最後に考察を述べる。

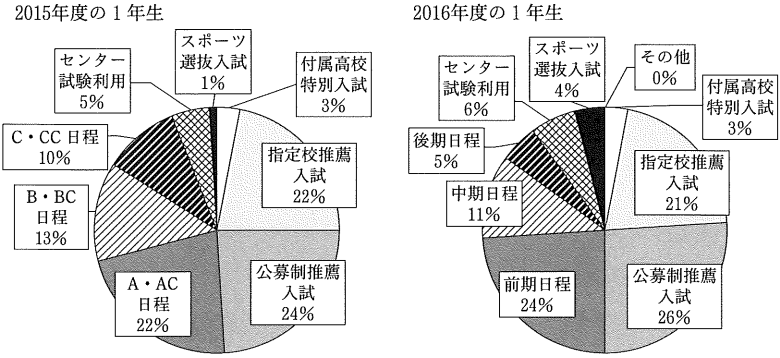
２．アンケートの集計結果とその考察

我々は，経済学部の１年生前期に開講されている「入門演習」において，

経済学部１年生アンケートの集計結果報告

2015年７月24日（金）および2016年７月19日（火）に「経済学部に入学した学生に関するアンケート」を実施した。有効回答数は，2015年度が284名であり，2016年度が292名であった。図１は，回答学生における年度ごとの入試区分の割合を示している。ただし，2016年度入試より，Ａ日程は前期日程，Ｂ日程は中期日程，Ｃ日程は後期日程と呼び名が変更された。

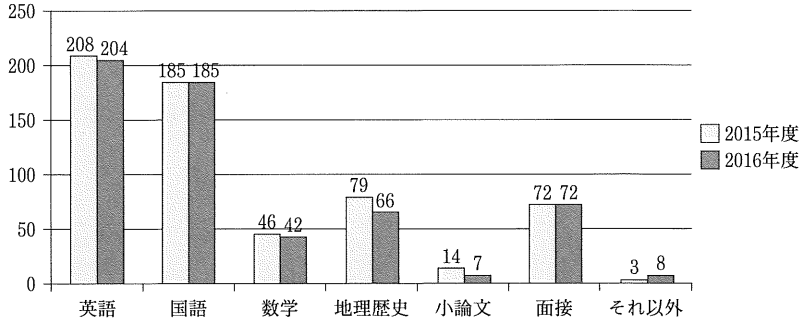
図１：入試区分の割合



2016年度入試から，前期日程のみ文系学部（学科）併願制度が始まったが，図１の結果から，2016年度１年生の入試区分に関してはその影響がほとんど無かったと考えられる。

本学経済学部を受験した際の受験科目に関する人数の合計を図２に示す。ここでは，複数回答可としているため，一人の学生が複数個の科目を選択している場合も存在する。図２より，各年度における入試科目の人数はほとんど同じ結果となっていることが分かる。英語を受験した人数が一番多いのは，すべての科目受験の入学試験において英語が必修科目となっているためである。国語も２つの入学試験（前期（A）日程，センター試験利用）において必修科目であり，他の科目受験の入学試験においても選択科目となっているため，人数が多くなっている。また，数学はすべての科目受験の入学試験において選択科目となっているが，前期（A）日程のみの選択科目となっている地理歴史より，

図2：入学試験における受験科目ごとの人数



受験人数が少ない。数学を受験する学生が少ないことは，数学を苦手とする学生や，高校のときにすべての数学科目を勉強していない学生が多く存在する可能性を示唆している。

次に，本学の他学部との併願状況を図3に示す。

図3：他学部を併願した学部ごとの人数

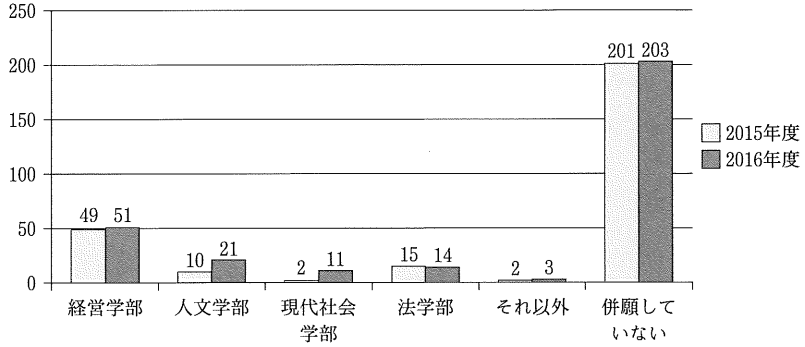


図3より，本学の入試においては他学部を併願していない人数が多い。併願している学部の中で一番多いのは経営学部である。2016年度入試の前期日程では，文系学部（学科）併願制度を実施したことにより，1日最大8学科9併願が可能になった。これにより，併願学部の数は増加傾向にあると予測したが，2016

年度においてはその傾向が見られなかった。

図２で示した入試科目ごとの人数において，「数学」と「地理歴史」の人数について言及した。この２つの受験科目に関して，その範囲を高校で学んだかどうかを調べるため，各科目について学習した人数の割合を図４に示す。

図４：各科目を学習した学生数の割合

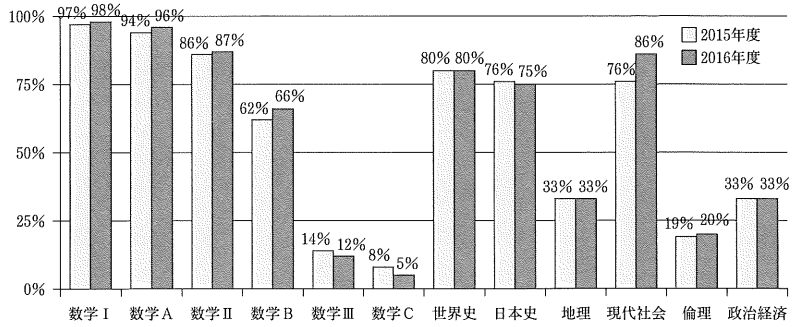
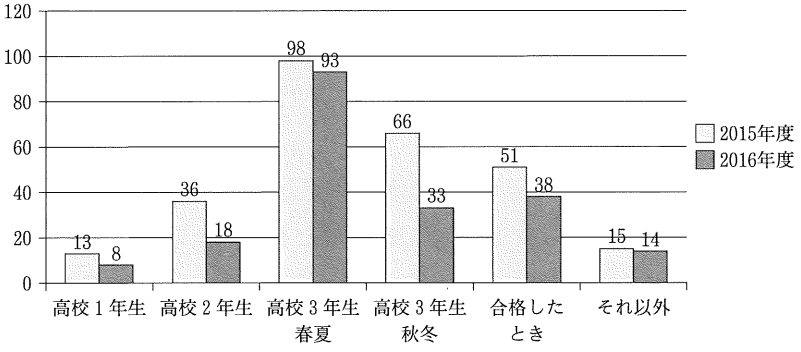


図４の結果も年度ごとの違いはほとんど無いと考えられる。本学の受験では範囲外となっている数学Ⅲと数学Ｃを学習した学生の割合が極端に低い。また，倫理や政治経済についてもその割合が低いことが分かる。これらの科目に関連する講義では，今後も未学習の学生の割合に注意が必要であろう。

続いて，経済学部への進路を決定した時期を図５に示す。

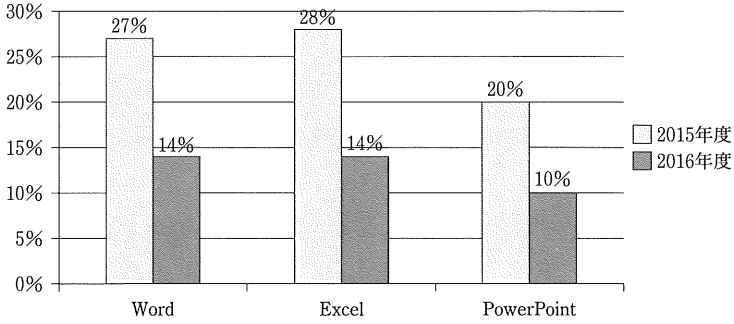
図５：進路決定の時期



2015年度，2016年度ともに，高校3年生の春夏に決定した人数が多く，次いで多いのが合格したときという結果となっている。2016年度の1年生は，2015年度の1年生に比べて，高校3年生の秋冬に進路を決定した人数が若干少ないことが分かる。

さらに，高校で学習した情報教育の内容について，Microsoft Office の中で Word，Excel，PowerPoint を学習したと回答した学生の割合を図6に示す。

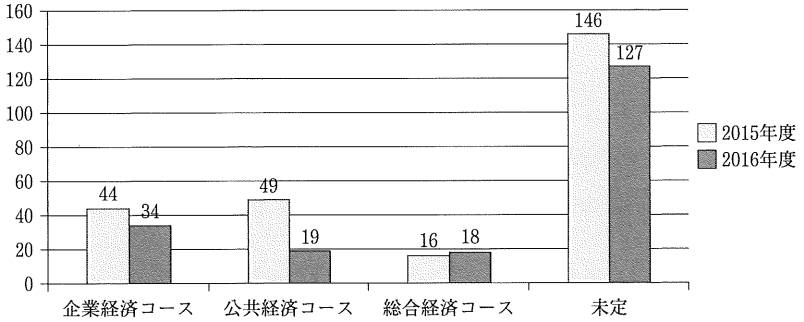
図6：各ソフトウェアを高校で学習した学生数の割合



学生が高校で学習した情報教育の内容は，図6に示すソフトウェアだけでなく，タイピング，情報倫理，動画作成，HP 作成，情報関連の検定試験のための対策などの少数意見があった。2015年度の学生より，2016年度の学生の方がこれらのソフトウェアを学習した人数の割合が減少している。また，学習した学生の割合が全て30%以下であることから，高校における情報教育が進んでいない可能性を示唆している。

本学経済学部では，2年生後期から企業経済コース・公共経済コース・総合経済コースの3つのコースに分かれ，各自の進路目標に応じた学修ができるような専門コースを設けている。1年生の前期終了時期において，それぞれのコースを希望している学生の人数を図7に示す。図7より，半数以上の学生が未定と回答している。3つのコースの中で希望している学生数の多いコースは，2015年度の学生では公共経済コースであったため，公務員や公益組織および金

図７：コース選択の希望



融関係への就職に魅力を感じていると考えられる。2016年度の学生では企業経済コースの希望人数が多いため，将来は現代の企業社会で活躍したいと考える学生が多くなっている。

最後に，2016年度の１年生に対してのみであるが，これまでの学生生活における満足度を図８に示す。ここで，満足度は５段階（5：満足している，4：やや満足している，3：どちらともいえない，2：やや不満を感じている，1：不満を感じている）とした。

図８：これまでの学生生活への満足度

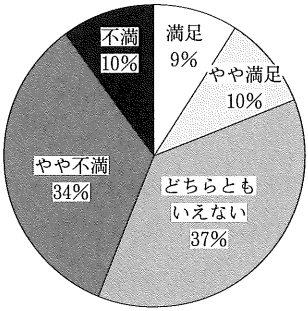


図８から，どちらともいえないと回答した学生が一番多く，次にやや不満していると回答した学生が多いことが分かる。満足・やや満足と感じていると回答

した学生は19%となっている。学生がどのような不満をもっているかについて，次章で議論する。

３．自由記述データの分析とその考察

ここでは，学生がこれまでの学生生活に関して不満に感じることを自由記述により回答した結果とその考察を行う。本報告では，2015年度と2016年度の学生における自由記述データを KH Corder を用いてテキスト分析を行い，その結果を共起ネットワークで表す（図９）。

図９：学生の自由記述データに関する共起ネットワーク

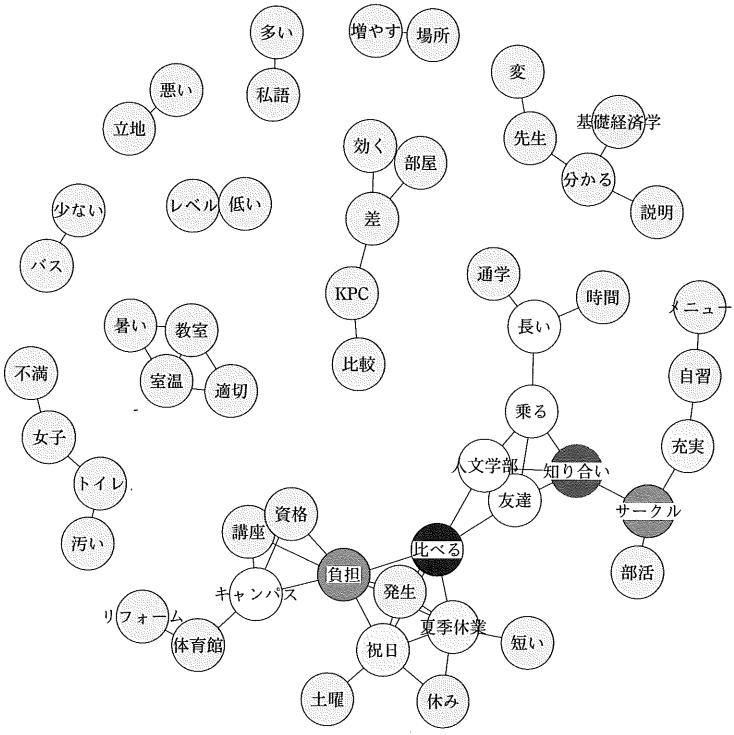


図９より，夏季休業が短いことや，祝日・土曜日の授業に対する不満，人文学

部と比べると友達を作る機会が少ない，資格講座のためのキャンパス移動の負担，教室の室温が暑い，トイレが汚いなどの意見が読み取れる。これらの意見を学部内で共有することによって，今後の学生生活の改善に役立てることができると考えられる。

４．おわりに

本論文では，2015年度および2016年度に開講された「入門演習」において，経済学部１年生対象のアンケートを実施し，高校での学習状況から今後の大学生活における複数の質問項目に関する調査結果を報告した。さらに，学生生活に関する自由記述データをテキストマイニングにより分析し，大学の施設などに関する不満だけでなく，経済学部における学生生活の改善のための今後検討すべき課題が明らかとなった。今回は自由記述を行った学生が少なかったため，今後はさらに多くの自由記述データを収集し，１年生全体における不満を明らかにしたい。また，アンケートを実施した2016年度１年生292名のうち，８名（約2.7%）が両面白紙回答，81名（約27.7%）が裏面白紙回答であった。そのため，いくつかの質問項目に関しては，回答が得られた約70%の学生のみの結果となっていることに注意が必要である。

本報告は，２年間の経済学部１年生の実態調査を行った結果を報告した。このようなアンケート調査を毎年行うことによって，教員は入学時の学生の学習状況や学生生活における不満などの傾向を把握することができ，さらには，新しいカリキュラムを作成する際の指針になるのではないかと期待している。

参　考　文　献

［１］　文部科学省：「平成27年度学校基本調査（確定値）について」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1365622.htm

［２］　大橋英五，“私立大学の課題”，大学時報，59(331)，p. 10-15，2010.

［３］　木下栄二，“新入生実態アンケート調査の分析（1）：「フェイス」および「大学（本学）の選択理由・入学後の期待等」”，桃山学院大学総合研究所紀要，第36巻，第

２号, p. 89-107, 2011.
［４］ 柴田淳子, “経済学部の学生に必要な基礎的な数学知識―教員の理想と学生の現状―”, 神戸学院大学経済学論集, 第46巻, 第１・２号, p. 75-84, 2014。
［５］ KH Corder (http://khc.sourceforge.net/)